

# 古典に向かう愛と論理

——日本思想史学の方法論としての「フィロロギー」について

高原 智史

日本思想史という対象が可能であるとして、いかなる方法を用いることが適当であり、またそれを考究することにはいかなる意義があるのだろうか。ここで、日本思想を日本における思想ではなく、「日本」を思考する思想としてとらえたい。そうしてみれば、属地的、属人的に日本に属するところで行われた思想であっても、当然には日本思想とはならないものがあるだろうし、日本の外で行われたものであっても、日本思想的であるものがあるだろう。しかし、そもそも「日本」とその内と外というのはいかにして決まるのだろうか。

ベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体」を挙げるまでもなく、そもそも「日本」それ自体が思想の産物である。思想の産物として象られている「日本」を限定の指標として持つ「日本思想」はどのようなものとしてあるのだろうか。ある種の思想の連なりが「日本」を形作り、出来上がった「日本」という規定がある種の思想の連なりを「日本思想」に束ねる。かような再帰性がそこにはある。

日本思想史学の事始めは、東北帝国大学法文学部に日本思想史学講座が設置された大正十三（1924）年のこととされる<sup>1</sup>。しかし、大学に講座が設置されたことがなぜ学のはじまりになるのか。大学こそが学の担い手であるということならば、そのことにはどのような意味があるのか。桂島宣弘は、この講座設置以前に「外来文化との関連で日本思想の来歴をたどる言説は、〈学術知〉としては既に世紀転換期から明治末年頃に登場していたと見てよいように思われる。」<sup>2</sup>としているが、〈学術知〉が大学という制度から切り離して考えられるとして、どのように考えるか。また、桂島は「あらゆる自己認識は、他者認識・他者表象の産物である。」<sup>3</sup>ともしているが、他者認識が先行し、また比重においても自己認識を凌駕している日本の〈学術知〉の状況をどう考えるか。<sup>4</sup>

日本思想史学講座初代担当者の村岡典嗣が、講座を担当する以前に出版した『本居宣長』<sup>5</sup>において、ドイツのアウグスト・ベックの文献学（フィロロギー）の方法論を適用し、そのことが実証主義史学の立場から学問としての日本思想史学の基礎を確立したと言われる。学が〈学術知〉として成立するためには、制度

の他に、確固とした方法が必要になるであろう。ベックの文献学のテーゼは、「認識されたものの認識」であり、その目的は「言語と文学が言及する範囲内におけるドイツ民族の精神生活の研究」であった<sup>6</sup>。そのような、元来は「ドイツ民族の精神生活の研究」のためにつくられた方法論を「日本」に適用することに問題はないのか。村岡は次のように言っている。

欧州の文献学も、固より歴史がある。随って、文献学の意義も歴史的に色々の差別があるが、古文献によって古代文明を、全汎に涉って明らかにするといふ、大本の目的に於ては各学者の説くところ、趣を同じうしてゐる。而して、それとともに、所謂古代文明たる希臘、羅馬の文明を理想的に憧憬する情を有してゐたことも、同様である。これらの大体の性質に於いて、考へると、宣長学は、その等しく日本上代の文明を理想として、その文明の状態を、社会現象の全汎にわたって明らかにしようとした点に於いて、その先輩たる春満、真淵の学問とともに、欧州文献学と軌を一にしてゐるものであることは、殆んど明白であるが、宣長学に至っては特に、単にさる大体の性質に於いてのみならず、更に、その本質的意義に於いて文献学と称し得るものがある。<sup>7</sup>

つまり、宣長学はすなわちフィロロギーであつて、ベックを学んだ村岡は、その視点によって宣長の方法がベックのいうフィロロギーであると「思い出した」のである。ただ、村岡は宣長学にはベックのフィロロギーとは違うところがあるといい、宣長学をフィロロギーの「変態」と呼んだ<sup>8</sup>。すなわち、文献学がそれ自体哲学するものではなく、哲学や文学が生み出したものを理解し、認識するものであるところ、宣長が「古代人の思想を、古代人の如く理解すると共に、古代人の如くフィロソフィイレンしてゐる」<sup>9</sup>ことが「変態」であるというのである。この宣長とベックの方法上のズレについては、宣長学の「限界」だとされるが<sup>10</sup>、西洋を「標準」とした上で「変態」や「限界」というのにとどまらないで、さらに、無批判に西洋＝「普遍」とするのではなく、「普遍」の立て方が工夫されるべきである。そこでは、宣長学が「欧州文献学と軌を一にしてゐる」ということをどう考えるかが焦点になるだろう。ここにおいて思想史の方法論は、比較思想と否応なく接合する。とはいえ、村岡が生きた時代においては、西洋からの「オリエンタリズムを意識した「カウンター・オリエンタリズム」ともいうべき視点が存在して」おり、「『西洋の学問社会』の存在があり、それが当該期の官学アカデミズムの学問性を担保する」<sup>11</sup> 状況にあったのであり、村岡が西洋のあり

様を「標準」ととらえ、そこから外れたように見えた宣長学を「変態」と位置付けたことには当時なりの理由がある。

しかし、そもそも「認識されたものの認識」というテーゼ自体にどこまでの妥当性があるのだろうか。フィロロギーがギリシア語の愛（フィロス）と論理（ロゴス）の合成語であって、時間と空間を超えて古典の世界に入っていきたいという情熱から生まれたものだとすれば、愛の次元では、時空を隔てた古典との距離をゼロとし、「認識されたものの認識」が目指されるべきである。それと同時に、論理の次元では、距離ゼロの点から見た古典のあり様が認識されるべきであるとともに、古典と現在とを隔てる距離が測られるべきではないだろうか。その距離から反省が生まれる。文献学に基づいた「個別の分野を超えた全体的な「日本精神」の探究が、しばしば国家統合の政治的イデオロギーに利用された」<sup>12</sup> ことを丸山眞男は指摘したが、丸山自身、自らの論文の宣長解釈が「主情主義」に偏しているとされたのに対し、「当時、国学はどういうふうに言われていたか」と、圧倒的に優位なのは国体論的国学なのです。それに対して主情主義を強調すること自体が、時代に対する非常にアンチの意味があるわけです。」<sup>13</sup> としている。その後で丸山は「いまみたいな時代に学問するということは非常に難しい…つまり、対決するものがないわけです。」<sup>14</sup> というが、果して本当にそうだろうか。丸山のこの回顧は 1988 年から 1994 年にかけて行われた<sup>15</sup>。冷戦が終結してすぐのこの時期には、このような感慨が抱かれたのだろう。それから四半世紀経ってみて、「対決するものがない」とは、よもや言えないだろう。対決とまでは言わないにしても、対処すべき課題は山ほどある。その一つに globalization への対処があるだろう。思えば、村岡が際会した明治日本というのは、civilization との全面的な対決が迫られた時代であり、彼が立ち上げた日本思想史学はそれへの一つの対応であった。現在、globalization への対処に際し、日本思想史学が刷新されるべきだとすれば、いまや村岡そのものを古典として振り返るべきである。その際、「認識されたものの認識」という村岡の方法論に従うべきかどうかは、考慮を要する事柄である。村岡自身、フィロロギーも「そのままに完全な思想史もしくは日本思想史とはしがたい」<sup>16</sup> とし、これを「補正」する必要があるとしていた。他方、文献学が「認識されたもの」の完結された形の存在を予想しているのに対し、思想史は「認識されたもの」を史的発展と見なければならないとし、宣長に代表される我国の文献学的研究に最も欠けていたのは史的認識であるとしている。村岡自身は「文献学的段階」の上に「歴史学的段階」を設けて、「発展」を取り扱うべく工夫している。村岡は宣長学が史的発展をうまく取り扱

えていない原因を「我国の学問の師とした支那の学風」<sup>17</sup>に求めている。「支那の学風」や村岡の時代に「標準」であった西洋の学問の規範性からある程度自由になっている今日、史的発展を的確に捉えられる、より充実した日本思想史学の方法論の樹立が求められている。

## 注

- 1 当初は文化史学第一講座に日本思想史学科が置かれた。「日本思想史学講座」に改称されるのは昭和三十八（1963）年。
- 2 桂島宣弘「一国思想史学の臨界点」（同『自他認識の思想史—日本ナショナリズムの生成と東アジア』（有志舎、2008年））96頁
- 3 同前、105頁
- 4 西洋思想史や、さらに中国思想史、インド思想史と比べても、日本思想史の制度化は遅れたと言われるが、明治十（1877）年に設立された東京大学の文学部に二つだけ置かれた学科のその一つが和漢文学科であった。（もう一つは史学、哲学及政治学科）さらに明治十五（1882）年には古典講習科も置かれた。近年、この和漢文学科、古典講習科の見直しが進んでおり、従来のイメージが覆される可能性がある。そのようなものとして、品田悦一、齋藤希史『「国書」の起源——近代日本の古典編成』（新曜社、2019年）
- 5 警醒社、1911年
- 6 江藤裕之「フィロロギーとしての国学研究」（『国際文化研究科論集』21号、東北大学大学院国際文化研究科、2013年）59頁
- 7 村岡典嗣『本居宣長』（岩波書店、1928年）342頁
- 8 同前、371頁
- 9 同前、366頁
- 10 前田勉「解説」（村岡典嗣『本居宣長2』（平凡社東洋文庫、2006年））289頁
- 11 前掲桂島、90頁
- 12 苅部直「村岡典嗣と丸山眞男」（東京女子大学比較文化研究所附置丸山眞男記念比較思想研究センター報告〔別冊〕、東京女子大学比較文化研究所附置丸山眞男記念比較思想研究センター、2017年）88頁
- 13 松沢弘陽他編『定本丸山眞男回顧談（上）』（岩波現代文庫、2016年）240頁
- 14 同前、241頁
- 15 同前、iii頁
- 16 村岡典嗣『日本思想史概説』（創文社、1961年）9頁
- 17 同前、56頁